



高等学校巡回指導員より～手記「訪問を振り返って」(1)～



高等学校巡回指導員は、とやまの特別支援教育強化充実事業として県に2名配置され、県内39校を巡回しながら、教員研修、生徒の実態把握、関係機関との連携等を通して、一人一人の教育的ニーズに応じた合理的配慮の提供に向けた専門的な指導助言を行っています。令和5年度は、延べ約250校を訪問しました。

そんな2名の巡回指導員の手記を、今号と次号にわたり紹介します。



巡回指導を通して、生徒の支援に関する相談のニーズは年々高まってきており、学校からの教育相談や生徒・保護者のニーズも多様化している印象があります。中学校卒業時の進路先や高校在学中の進路変更先の選択肢も増えてきており、学校教育に対する生徒・保護者の価値観も社会の変化と共に大きく変わってきています。

高等学校は学科や専門教科等の特色があるなど、小中学校とは異なる面が多いですが、中学校との連携や学校の新たな支援の工夫により、生徒が安心して落ち着いた学校生活を送っている事例が多くあります。

<個別の教育支援計画等の引継ぎや出身中学校との情報交換>

- ・座席配置の工夫、クールダウンの場の設置、感覚過敏への対応
- ・同じ出身中学校の生徒との人間関係を考慮したペアやグループづくり
- ・個別の言葉かけや定期的な面談、視覚情報による伝達や確認



<高校入学後、新たに実施された環境設定や配慮>

- ・クラウドサーバーを活用した連絡や提出課題の確認
- ・識字障害や書字障害のある生徒のタブレット使用、板書の撮影、ネット情報の活用の許可
- ・考査時の時間延長や別室受験、解答が分かっていても書けない生徒の代筆解答の検討
- ・頻繁にトイレに行く過敏性腸症候群の生徒に、その都度の入室届の手続き免除
- ・実習時の安全面の確保のための教員配置や見守り方、作業手順等の工夫
- ・スマホのリマインダーや各種アプリの活用

<中学校で実施されていた配慮事項が、高校入学後、実態に応じて再検討された事例>

- ・筆談でコミュニケーションしてきた場面緘黙の生徒が、環境に適応する中で、徐々に自ら話すようになってきたため、答えやすい発問や事前通告等の配慮に変更した。
- ・不安障害やストレス障害、起立性調節障害、愛着障害等の診断を受けた生徒が、環境の変化や新たな人間関係づくり、生活リズムの改善に伴って学校生活を円滑に送れるようになってきたため、個別支援や定期的な面談を減らし、見守りを増やした。

上記のように、個別の教育支援計画を通して、一人一人に応じた適切な対応や必要な配慮を学校間で引き継いだり、新たな工夫をしたりするとともに、成長の過程で改善していることに関しては徐々に支援を減らしていくことが、社会で力強く生きていく力を身に付けることにつながるのかもしれませんが。